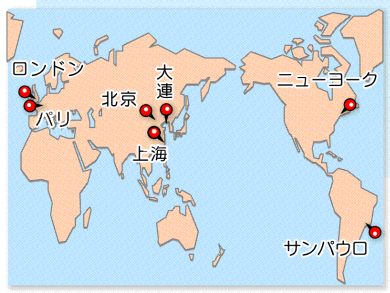
2019年04月01日 新潟日報 朝刊 解説面 013頁　　(C)新潟日報社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

グローバル にいがた

国際交流拠点から



新潟日報社が開設した米ニューヨーク(NY)、ブラジル・サンパウロ、中国・上海、欧州(パリ)の国際交流拠点などを通じ、海外で暮らす本県関係者から現地の様子をリポートしてもらい、毎月第1月曜日に紹介しています。また、新潟日報ホームページ「モア」にも掲載し、感想や意見を受け付けています。

第1月曜掲載

from NY

山田　久さん
＝新潟市出身＝

おおらかな街が好き

毎年6月に開かれるNY市のLGBTパレード。世界中から集まった個性的な髪型、服装の人たちでにぎわう

2月、ニューヨーク(NY)市が「髪形で人を差別してはいけない」というガイドラインを公表した。

職場で髪形を理由に待遇を変えたり、学校で教師が生徒の髪形をとやかく言ったりしてはいけないというのだ。肌の色も髪の色も髪形も多様な「人種のるつぼ」NYでいまさらかと、驚いた出来事だ。

日本では、職場や学校で髪形や髪の色が厳しく制限されてきた。生まれつき髪の色が明るかった私の同級生は、「周りと合わせるため」わざわざ髪を黒く染めていた。ハードロックやヘビーメタルが好きな私は、憧れのミュージシャンのまねをして学生時代から髪を長くしてきたが、高校では教師からハサミを持って追いかけられ、会社では上司に「社会人らしく髪を切れ！」と怒られ、いやいや髪を短くしていた(それでも人よりは少しだけ長かったが…)。

NYで私の長髪に文句を言う人はいない(妻以外は)。周りからはむしろそれが私の「個性」と受け入れられている。そんなこともあり、自分が人からどう見られているかをあまり気にしなくなった。自分より個性的で「変な」人間が多いということもあるだろう。日本では「出るくいは打たれる」というが、NYでは「他のくいも出ているから打たれにくい」のかもしれない。

そんなNY生活も楽なことばかりではない。日本では考えられない不便さを数えきれないほど経験してきた。地下鉄やバスが時間どおりに来ない、店員や警官の態度が悪すぎる、公衆トイレがなかなか見つからない…といった具合だ。

なぜそんな不便なNYに長く住んでいるのか。正直、自分でもよく分からない。日本食が大好きだし、日本のテレビ番組を楽しみに見ている。周りからは「日本に帰れば?」とよく言われる。それでも私はNYがいい。人がどんな髪形にしても放っておいてくれるおおらかさがこの街にはあるからだ。

(山田さんは1970年生まれ。高校卒業後に家族で米国に移住し、現在は日系テレビ制作会社で報道の仕事に携わっています)

from サンパウロ

駒形　秀雄さん
＝新潟市東区出身＝

日系農家 輸出に奮闘

ブラジルの農場。日系人の農家の中には、生産から販売までを手掛けている人もいる

日本では、経済連携協定の影響で「自分たちの農業経営が苦境に立たされるのではないか」と心配する声が上がっているようです。

しかし、ここブラジルでは農産品の生産、販売は以前から「自由競争の原則の下、それが当然」との考えが一般的です。

そんなブラジルで立派に農業経営をしている日系の高倉ラウロさん、さよさん夫妻の例を紹介します。ちなみに2人は本県ともゆかりがあります。

高倉さんはペルナンブコ州の州都から720キロほど内陸に入ったペトロリーナ市郊外で、ブドウやマンゴーなどを栽培しています。国内はもちろん、ヨーロッパや北米などにも輸出し、順調に収益を伸ばしています。

現在、45ヘクタールの土地でブドウを、40ヘクタールの土地でマンゴーをそれぞれ栽培しています。この作付比率は市場の見通しを見ながら割合を変えたり、他の作物に変えたりしています。

これらの作物は地元での消費量は限られていますから、それ以上の収益を上げるには限界があります。

以前は生産一筋だったそうですが、何とかこの壁を突き破ろうとしました。

そして、同じ日系農家5家族で組合をつくりました。ここで冷蔵保管や包装をし、同一ブランドでヨーロッパ、北米などに輸出を始めたのです。

冬には果物が採れないヨーロッパの市場に、いつでも作物ができる「常夏の国」ブラジルの果物を良い価格で輸出するシステムを作ったのです。

彼らは作物の栽培だけでなく、常に市場が求めるものを研究しています。例えばブドウの場合、「甘み」と「酸っぱさ」の微妙なバランスを求めるヨーロッパにはそれに適した品種を、「糖度が高いほど良い」というブラジルにはそれに合った品種を提供しています。

生産から販売までを担う6次産業化を体現している高倉さんは、朝起きると1時間ほど仲間とのテニスを楽しみ、それから朝の食事を取るそうです。

こうしたゆとりも仕事にプラスに働いているようです。

(駒形さんは1933年生まれ。商社勤務を経てサンパウロに住んでいます)

from パリ

小笠原　尚子さん
＝新潟・フランス協会パリ支部会員＝

芸術育てる〝見巧者〟

ジャポニズム2018パリ公演で人間国宝の野村萬師を囲んで

〝花の都パリ〟というけれど、実際生活をしていくとなると忍耐勝負の部分がほとんどである。

問い合わせ電話がつながらないのは当たり前、役所書類が一回で通れば超ラッキー、スーパーで長蛇の列、その先でレジの店員さんはお客さんと世間話、しかし意外にも皆文句も言わず待つ、出直す、やり過ごす…〝人生なんてこんなもの〟とちょっと肩をすくめて次の策を練る…まずは目の前の状況を受け入れ次に進む。

サービス、情報提供の面で圧倒的にたけている日本と比べ、こちらの生活では能動的であることが不可欠だ。能動的に情報を取りに行かなければ大切な機会を失ってしまう。アナウンスのない地下鉄やバスなどはその最たるもの。

美術館や博物館を訪れると小学校低学年グループをよく見かける。授業の一環として来館した子供たちは床に座り、学芸員の説明に耳を傾け、質問や自分の感想を述べる。

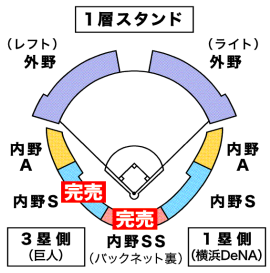
子供たちはさまざまな文化、芸術、学問についての説明を受け、自身のフィルターにかけ、それらをアウトプットする作業を繰り返し行っている。その作業で子供たちは自然に、考える力と発言する力を養い、能動的に物事を捉えていくすべを学ぶ。大人は物事の本質を捉えられるよう示唆し、子供たちは幼いころから哲学的思考法を習得できる環境にあるのだ。

日本在住の狂言師である夫と、若くしてこの世を去られた彼の師の思いを受け、私自身は2014年からパリを拠点として能楽の普及に努めている。日本では〝敷居の高い古典〟と見られがちなので心配したが、あるマダムが「私たちは目の前の表現に自分なりの説明を付ける教育を受けているので何ら問題はない」と言うように、随分と楽しんでいただいている。

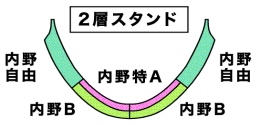
役者が演じるプロならば、観客は見るプロ〝見巧者〟。フランスの文化芸術は、幼いころからの教育を通して育てられた〝見巧者〟たちによって支えられているのだと、ありがたく痛感する日々である。

(小笠原さんは父の出身地である旧羽茂町に小学生の時に移住。2014年からパリに住み、現在「アトリエ　オガ　パリ」代表を務めています)

©YDB　©YOMIURI GIANTS



●内野2層自由席のみ自由席となります。内野2層自由席(こども)の料金は、4歳から中学生までのお客様に適用となります。(2019年3月に中学を卒業される方も適用)
●4才以上の方からチケットが必要となります。(3才以下は膝上観戦可能ですが、お席が必要な場合は有料となります)
●車イス席についてはサンライズプロモーション北陸、HARD OFF ECOスタジアム新潟へお問合せください。



席種	内野自由以外は指定席		前売
内野	SS席	(1層)	完売
	S席	(1層)	6,000円
	特A席	(2層)	5,500円
	A席	(1層)	4,700円
	B席	(2層)	3,500円
	自由席 大人	(2層)	2,700円
	自由席 こども	(2層)	1,500円
外野席			2,300円
駐車券			2,500円

※当日は各500円増し

入場券販売所
●HARD OFF ECOスタジアム新潟
●新潟伊勢丹
●トップトラベル新潟(DeKKY401内)
●インフォメーションセンターえん(メディアシップ1F)
●新潟県職員生活協同組合
●横浜DeNAベイスターズチケット(https://ticket.baystars.co.jp/)
●セブン-イレブン(セブンチケット)
●ローソンチケット(Lコード:31152)
●チケットぴあ(Pコード:591-040)
●イープラス(http://eplus.jp)　●Yahoo!チケット
●サンライズプロモーション北陸(tel.025-246-3939)
●ホクチケ(ホクチケドットコム)
※NIC新潟日報販売店でも取り次ぎます

駐車券販売所
●セブン-イレブン(セブンチケット)
●ローソンチケット(Lコード:31152)

主催／BSN新潟放送、横浜DeNAベイスターズ　共催／新潟日報社

お問い合わせ
チケット　サンライズプロモーション北陸 TEL.025-246-3939 (火～金 12:00～18:00 土 10:00～15:00)
試合運営　BSNイベントダイヤル TEL.025-247-0900 (平日9:30～17:30)